

# 29amF-300

## 漢方製剤における食後投与の実態

○福岡 勝志<sup>1</sup>(<sup>1</sup>日本調剤)

【目的】「傷寒論」「金匱要略」にも明記されているように、漢方製剤は古来より伝承されてきた食前・食間投与を基本とし、それが現在の承認用法・用量に引き継がれている。しかし、その妥当性を裏付ける明確な根拠は乏しく、臨床的には食後投与が行われるケースが少なくない。そこで今回、保険薬局で応需した処方せんを分析し、漢方製剤における食後投与の実態について、その背景を含めて検討を行った。【方法】2012年4～9月に日本調剤の都内101薬局で応需した処方せんのうち、漢方処方が含まれていた46,365枚を対象に、投与タイミングおよびその背景について調査した。【結果】患者の男女比は34:66で、平均年齢は58.8±20.3歳であった。処方科は内科が最も多く16,104枚(34.7%)で、精神神経科が4,594枚(9.9%)、消化器科が3,710枚(8.0%)という順であった。食前・食間投与は33,553枚(72.4%)で、食後投与は12,748枚(27.5%)、頓服が64枚(0.1%)であった。食後投与の処方が多かった科は、救急・放射線・麻酔科43.4%(428/986)、消化器科39.5%(1,467/3,710)、呼吸器科37.6%(349/928)であった。一方、食前投与が多かったのは和漢診療科94.4%(1,055/1,117)、産科・婦人科85.3%(2,659/3,118)、耳鼻咽喉科79.6%(2,084/2,617)であった。

【考察】漢方製剤の食後投与は全体の27.5%を占め、その比率は処方科によって大きく異なっていた。食後投与の理由としては、胃腸障害予防、アドヒアランス向上などが想定されるが、承認事項が食前・食間投与に限定されていなければ、食後投与がもっと多くなった可能性がある。今後も引き続き食後投与の実態を臨床効果を含めた多方面から分析し、漢方製剤の承認された用法・用量変更の可能性について検討していきたい。